



地育人

卒業生の今

滋賀県立野洲養護学校養護教諭
 奥田 祐子
 Yuuko Okuda

滋賀県立大学地域共生センター 助教
 上田 洋平
 Youhei Ueda



滋賀県立大学 OBOG Magazine
 県大の星 第2号

発行月 | 2017年7月
 発行 | 滋賀県立大学 経営企画グループ
 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
 Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470

企画・制作・編集 | スパイス事業部 / 双林株式会社
 アートディレクション / デザイン | 澤田未来 (スパイス事業部 / 双林株式会社)
 取材 / 編集 | 野田大輔 (コメディア株式会社)
 監修 | 印南比呂志 (人間文化学部生活デザイン学科教授)
 印刷 | 双林株式会社

キャンパスは琵琶湖。 テキストは人間。

で育った卒業生に県大教育の成果を探るインタビュー集、第二号

地域が育つということ、とは 人が育つということ。

様々な地域や職業の最前線で活躍中のOBやOGにフォーカスを当てる「県大の星」。待望の第2号、刊行です。

タイトルは「地育人」。県大ならではの地域を舞台とした実践的な学びのなかに育ち、その経験と能力を活かしてこれからの地域を育てていこうとしている卒業生を象徴しています。

持続可能なコミュニティの創造を目指してまちづくりに尽力する市町の職員をはじめ、地域の資源活用や環境負荷の低減に働きかける技術者、また課題を抱える地域に移住し、地元の皆さんとともに解決を目指す地域おこし協力隊員など、そのアプローチ方法や活動内容もさまざま。今号は教職員として地域の未来と向き合う二人をご紹介します。

一人は、まちのプロフィールを図象化するプロセスを通じてコミュニティの再生、活性を目指す「心象図法ふるさと絵屏風」の研究に取り組みながら、学生と地域との橋渡しを続ける本学教員の上田洋平氏。もう一人は、滋賀県立野洲養護学校で養護教諭を務め、子どもたちの成長を見守る奥田祐子さんです。日々の活動はもとより、入学から卒業に至るまでの学びのプロセスと自身の成長について語っていただきました。



滋賀県立野洲養護学校 養護教諭
奥田 祐子
Yuuko Okuda

滋賀県立石山高等学校卒業
2012年度 人間看護学部人間看護学科卒業



滋賀県立大学地域共生センター助教
上田 洋平
Youhei Ueda

京都府立北嵯峨高等学校卒業
1998年度 滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科卒業
2004年度 滋賀県立大学大学院人間文化学研究所
博士後期課程単位取得退学
2015年度より慶應義塾大学院政策・メディア研究科
特任助教

人と人、場所と場所とをつなぎ、
地域の再生と創造を支援

case
01
地育人

上田 洋平

滋賀県立大学地域共生センター助教
慶應義塾大学院政策・メディア研究科特任助教





略歴:

1976年京都府生まれ。滋賀県在住。
1999年3月滋賀県立大学人間文化学部地域文化学専攻卒業。2005年3月滋賀県立大学大学院人間文化学専攻地域文化学専攻博士課程単位取得退学(第1期生)。専門は地域文化学、地域学。風土に根ざした暮らしと文化に関する研究と実践に取り組んでいる。地域コミュニティを人間の「からだ(物質/自然性)・ところ(関係/社会性)・たましい(時間・歴史性)」の根拠としての「在り」として捉え直し、その再生と創造を志向する。その過程で人々の「身識(五感体験)」をもとに地域のイメージを一枚の絵として表現する「心象図法」を開発し、各地で実践・展開している。「地域は斜交場」「思い出(過去)を育てて未来を創る」「めぐみのめぐりあわせ」「まぜて・ちらして・つなぐ」「居合わせから仕合せを」が合言葉。

2011年度日本青年会議所「人間力大賞(総務大臣・環境大臣賞)」受賞。

地域課題と大学の知見、人材を結び解決を支援する コーディネートとして

滋賀県立大学では、学部、大学院を通じて風土に根ざした暮らしと文化に関する研究、実践に取り組まされた。博士課程修了後は研究補助員として大学に残り、現在は地域文化学、地域学を専門として、滋賀県大を中心に他大学でも授業を受け持っています。

私が所属する滋賀県大の地域共生センターは、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」という県大の使命を遂行する前線基地のような機関であり、地域づくりに関する調査研究をはじめ、地域を再生し、可能性を拓いていくような人材の育成、そのために必要な仕組みづくりなどに取り組んでいます。

県大独自の全学共通地域教育プログラム「近江楽土地域学副専攻」や大学院全研究科共通の副専攻「近江環人地域再生学座」もそのひとつです。学部や研究科それぞれの専門性を活かしながら地域に貢献するためのスキルや、いろんな人たちと協力しながら課題解決していくための能力を身につけて、磨くことを目的としています。地域の皆さんの課題を研究材料として取り上げ、現場で発想し、実践することでより大きな学びを得ることが可能になります。いずれも地域と大学がともに育つ「共育」プログラムとして立ち上げに関わらせていただきました。それらの実績を踏まえて、全学挙げて



取り組む文部科学省の「地(知)の拠点整備(COO)事業」及び「地(知)の拠点大学による地方創生(COO+)事業」の推進に携わっています。地域のニーズと大学のシーズを結び、解決に向けた協働をコーディネートする、それが仕事のひとつです。

滋賀県は日本の縮図であり 地域の文化を学ぶのに恵まれた土地

工業県として近代化の恩恵によって豊かになってきた歴史を背景に、県民所得や貯蓄率が水準を保つ一方、奥山、人里、里海(湖)、里島(離島)など日本の原風景を構成する環境を随所に遺しているのが滋賀県です。琵琶湖の周りには、千年ちかくにわたって同じ田んぼを耕し続ける地域から人口の増えている地域まで140万人の営みがあり、豊かな水は京阪神1450万人の生活を支えています。科学技術に立脚したくらしとなりわいの象徴である原発が枕元(若狭地域)に立つ電流域でもあります。グローバルな経済や文明軸にも接しているし、山・里・湖の生態・環境に根ざした人と自然、人と人とのローカルなつながりのなかで文化を醸成させる環境も遺されている。それがクロスすることで新たな文化が生まれるという特異な地域であることを、やはり私も琵琶湖というキャンパスで学んできました。

地元の人ほど、滋賀県は地味で何にもないといいますが、限られた資源や様々な制約のなかで今日も明日も人びとの集団が無事に生きていけるようなコミュニティや仕組みづくり、持続させてきた。当

ならと皆さんが語り始めるのです。
びわ湖の浜のゴミが少なからず残念ですが、お年寄りたちの心の風景は違っていました。お櫃を洗っていると魚が寄ってくるので獲って食料にする。朝一番に水くみをして、お茶碗を洗って、洗濯をして、と時間で使い分けをする。シジミを取りながら水浴びをする、広い砂浜ではラッキョウが育つ。こどもたちは燃料となるたき物拾いをする。そこは水汲み場、炊事場、洗濯場、遊び場、そして農業生産や燃料確保の場所でもあり、デートもする憩いの場だったのです。

目の前の環境だけを見ても、そこには人と自然、人と人がいろんな形でかわり合い、資源や価値を引き出しながら生きてきたという履歴があります。そういう生き方を美しく感じました。もっと知りたくなりました。決して過去に戻るのではなく、この過去を育てることで、未来につながる何かが生まれると確信したからです。次は、これを新しい価値の土台とするためにどうアウトプットしていくかが課題になりました。

心にある風景を絵にし、過去を育て、未来に備える 「心象図法」ふるさと絵屏風を開発

当時、つまり草創期の県大には、動物行動学の権威である日高学長をはじめ、いろんな意味でレジェンドと呼ぶにふさわしい先生方がいらっしやいました。いちばんお世話になった高谷好一先生は京大で探検部をつつた人で、民族学の梅棹忠夫氏やKJ法の川喜田二郎氏たち、いわゆる京都学派の系譜に連なる先生でした。そうした影響もあって学んだみたKJ法は観察した事実や様々な意見・

発想を言葉に置き換え図式化していく方法ですが、ある日、お年寄りたちの体験やエピソードのデータをKJ法でまとめているとき、これを文字ではなく絵にすれば面白いのではないかというアイデアが浮かんだのです。ちょうど同じ修士課程に画家を目指すべく絵の修業をしていた同期生がいたので、おしいちゃんやおばあちゃんたちの心の風景を絵にしてみたいか、とそそのかしてみました。その題材には、大学が立地する地元八坂の人びとのエピソードを取り上げました。

いいものができあがったので、話を聞かせてくれた八坂のお年寄りに見ってもらった。すると皆さんが目を見開かせて当時のことを語りはじめました。絵には思いがけない力があつた。これはもっと整理してやってみれば面白いかもしれないなと思いました。これが「心象図法」そして「ふるさと絵屏風」の原点です。

近江学派と呼べるような新しい学問を 後押ししてくれたのはこの大学の風土

「心象図法」はひらめきから生まれたものですが、その背景にはつねに現場で学び、あなたなりの地域学や地域文化学の方法をつくりなさいという指導がありました。専門性を磨きつつ、それらを総合したここ近江ならではの学問、いわば近江学派をつくらうという先生方の気概が私たちの行動の後押しになっていたのです。

新しい方法をつくるといっても、それは決して学問的に閉じたものとしてではなく、地域の人がと自身が主体となって取り組むことができ、自前なことばで自分たちの地域を語り、表現してもらえようかな、そんな方法にしたいと考えました。それが良かつ

たり前に思っているけれど、ものすごい力です。無事の文化、無事の経済、つまりビジネスではなく、「無事ネス」を培えることが地域の力であり、そうした地域の生き方や文化の中にこそ、これからの社会を構想するための手本やモデルがあると実感しています。

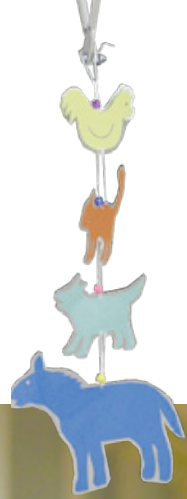
あなたなりの地域学や地域文化学の方法をつくりなさいと 地域へ放り出された学生時代

学生の頃は先生方に促され、とにかく地域へ出かけました。とはいえほとんど「放牧」で、具体的なテーマや手順が示されるわけではないし、答えが用意されているわけではない。何を見るか何を聞くか、そして何をどう考えるのか、つまり研究者としての目と耳、さらにアタマも現場で拾ってこい。

地域についてどんな意見を持っていますか? と古老たちにいきなり聞いても、当然急には出てきません。そうではなくて、まず、何を体験してきたの? どんな風景を見て、どんな服を着て、どんな匂いがかいできたの? と問いかけたら、それ



人びとの「身識(五感体験)」をもとに地域の人びと自身が地域の姿を表現する。心象図法を用いて創られた数々の作品。参加された方々のそれぞれの想いが屏風やかたに丁寧に描かれている。



奥田 祐子

滋賀県立野洲養護学校 養護教諭

case
02
地 育 人

豊かな人間性と専門性を兼ね備えた 養護教諭を目指して



たのか、今では他府県を含めおよそ40の地域でこの手法が実践・展開されています。

「上田という男がこれまでにない地域学の手法を開発した」と高谷先生が著書の中で紹介してくださったことや、環境社会学者で、のちに滋賀県知事になられた嘉田由紀子さんたち諸先生から、これはいいから続けなさいとの言葉をいただいたこともはげみになりました。でもいちはばは地域の人自身が面白がるなかで横へ横へと広がっていったこと。ふるさと絵図づくりに触発されて、小学生とお年寄りが集まってカルタをつくったり、手ぬぐいをつくったり、地域のパンフレットをつくったり。地域の再生や創造につながる「あるものさがし」や、人と人とのつながりを促す機会となる新たなカルチャーを提案できたのではと、少しは自負もしています。

子どもたちが絵を眺めながらお年寄りたちと対話する。おじいちゃんたちはこの川で魚をいっぱい獲って水も飲んで、ということ聞いた子にとっては、その川は、次にその横を通るときにはそれまで思っていたようなどぶ川とは違うものになると思っています。認知が変わることで行動が変わる、すると未来は変わっていく。「過去を育てて未来をつくる」。それを願いながら、その営みをお手伝いしたい。

地域の人々自身の体験や認識、地域にある当たり前ものなどをいろんな形で表現していただくことで、新しい地域や社会につなげることを、これからも応援していきたいと考えています。



たいと考えています。

「居合わせ」から「仕合わせ」へ
人と人、人と場所をつなぐ飲み

私が育った京都の嵯峨嵐山には豊かな自然が残っていて、川では魚をつかんだり里山でクワガタを探ったりしました。岩波少年文庫の「ドリトル先生」シリーズと、日高先生が監修された後に知ったのですが、「小さな生き物暮らしと飼い方」をバイブルに、博物学者になることを夢見る小学生でした。一期生として滋賀県立大学へ来たならなんと、動物と「喋れる」日高先生、世界冒険譚を話してくださる高谷先生がいらっしやう。先生が私の話をじつと聞いてくださるような環境だったので。学生時代はまさに夢のような時間でした。

学生たちにはできるだけいろんな人に出会ってほしいと思っています。出会う機会をつくるのが私の仕事ですし、そこでの出会いが、学生にとって人生の転機になることもある。触発される出会いがあれば、あとは学生が自ら育つ。副専攻の授業ではとくに大切にしています。

地域に向き合う中でめぐりあい、解決の現場に居合わせる中で仕合わせが起こるのを見るのが楽しく幸せでもあります。ないものねだりではなくあるもの探しをしながらどう結びつけたいかを考える。歴史的な文化や自然と関わるなかで見出した知恵を統合して新しい営みをつくる。文化は恵みのめぐりあわせだと思っています。未来につながるめぐりあわせを見逃さないよう、常に現場に立って、まなざしを磨いていきたいと考えています。



- 1 高島市安曇川町沖田の沖田糸里語り部会(区民有志)により、高島市自治会ステップアップ事業として実施された「沖田糸里ふるさと絵屏風」。
- 2 南比良ふるさと絵屏風づくりの会で制作された大津市南比良の「南比良ふるさと絵屏風」。「結の湖都 大津」まちづくりパワーアップ事業の採択を受け、県大の指導のもと成安造形大学の協力を経て完成。





地域の中核となる養護学校で 370名の生徒と過ごす毎日

在学中に看護師と保健師の国家資格を取得し、滋賀県の採用試験を受けて現在この学校で養護教諭を務めています。

野洲養護学校は県下最大の特別支援学校で、周辺の四市一町からおよそ370名の生徒が通っています。小学生から高校生まで障害や疾患に合わせて60のクラスに分かれており、私たち養護教諭をはじめ介助員や看護師、臨時講師やボランティアスタッフなど200名を超える職員の皆さんが子どもたちと向き合っています。生徒数は当初の予想を上回って増加する傾向にあり、重度化や重複化、多様化も進みつつあります。適切な受け入れを行うには、施設の充実もさることながら一人一人の生徒をきちんと見てあげることが最も重要になります。

言葉や表情に表れない 心の奥底を読み取るのが 大切なスキル

私は普段、保健室に待機して子どもたちの健康に関する手続きなどの事務作業を行っているが、不調を訴えてやってくる子どもたちのケアに当たっています。なかには平気そうな顔で「しゃべりに来たよ」という子どももいますが、例えば家族と喧嘩してややもやしているといったことが言葉の裏側に潜んでいる場合があります。いらいらするだけでなくにも話さないこともありませんが、よく聞いてみると原因は友だちとのめんど、といったことも。こへ来るには、やはり理由があるのです。かすり傷などは目に見えますが、心のなかのことは信頼関係をつくっていかねれば確かめることができません。そんな気持ちで向き合っているなら、ある日自分からしゃべってくれるようになりま。

医療的ケアが必要な子どもは、ちよつとした天候の変化などで体調を崩すこともありますし、細かく見ていかないと子どもも状況に気づけないこともあります。生徒は何人いたとしても、一人一人を観ることが仕事の基本です。担任の先生や看護師さんと常に連携をとり細かい情報を共有しながら対応に努めています。全く同じ日は一日もなく、体がいくつあっても足りないと思うくらい大変な毎日ですが、そこにやりがいも感じています。

学校が大好きだった子ども時代 生徒たちにも実りある時間を 過ごしてほしい

私自身は、子どものころから学校が大好きでした。将来は教師として働きたい、と漠然としながらも思ってきました。ところが中学生になるころ、不登校という言葉や学校に来ることができない生徒の存在を知ることになったのです。私にとって学校は楽しいところでしたが、教室へ来るということ自体をしんどく思う子がいる、来ていてもいろんな思いを持っている子がいる、そんなことを感じるようになりました。

学校生活はあつという間に終わり、社会に出たあとはずっと働くことになりました。限られた時間を実りあるものにしてあげたい、楽しいだけじゃなくて色んな意味で学べる時間にしてほしい、そう思うようになりました。私も、人間関係や勉強など、家だけでは学べないことを学校でたくさん学ばせていただきましたから。でも、人前に出るとはそれほど得意ではなかったため、一人一人の子ともじっくりかかわり、支え、守っていかける仕事と考えているうちに保健室という場所や、そこで働く養護教諭の姿にたどり着きました。養護教諭は体も心もどちらにもかかわっていかける仕事だという思いもありました。

まず看護師、そして養護教諭 2ステップで難関を目指せる 県大に

滋賀県大を選んだのは、当時では珍しく養護教諭

答えやすいとか、気づいてもらうにはどんな声かけをすればよいか、あるいは自分が同じ立場で経験したことを話すことで共感を得るなど、すべてが今の仕事の下地になっています。

高校卒業後はすべて自己責任 家の厳しい方針が 自立心を養うことに

高校を卒業したら自分の生活は自分で責任を負いなさい、というのが両親の方針でしたので、学費を除いて下宿の家賃から水道光熱費、食費まで奨学金とアルバイトで賄うという生活が始まります。

合格が決まるとまず父親と一緒に下宿探しに出かけました。学校が紹介してくれる物件のなかで最もリーズナブルな家賃で住めるのが女性専用のシェアハウスでした。数件見て回ったうえで、掃除が一番行き届いているところに決めました。家を出るのも初めてですし、もちろん見ず知らずの人と住むのも初めてですから、

の資格をとれる看護学部があったからです。養護教諭になるには難関の採用試験を突破しなければなりませんからね。まず看護師になって色んな勉強を重ね、いつかなれたらいいなと思っていました。養護教諭の仕事に看護師の知識や経験は生きてくるでしょうし、看護師である親も学んでおくようにと勧められました。じっくりと夢の実現を目指すには、県大がちょうどよかったです。

実際に授業や実習の9割は看護師になるためのものでした。採用試験を受けてダメな場合はここで臨時講師になるか看護師として病院勤めをするか、と考えていました。

滋賀県は特に養護教諭は新卒で取らない、という定評もありましたので、初年度は全員落ちるものと思ろ気軽に考えていました。ところが一級上の先輩が現役で合格したのです。受かるかもしれないという可能性が見えたときに怖くなって、そこから必死で勉強したことを覚えています。もし同級生が受かって自分は落ちたと思ったら、やはり後悔しか残らないだろうと思っただけです。受かったときは本当にうれしく思いました。

卒業と同時に養護教諭の免許をもらい、国家試験を受けて看護師と保健師の資格も取りました。



精神看護ゼミで実践的に学んだ 子どもの心身の成長

ゼミは精神看護学に入りました。学びの実践を目的に、彦根の青少年立ち直り支援センター「あすくる彦根」に支援員の一人として参加し、一年間通って一人の子どもの成長を観察し続けました。学校になじめず非行的な行動も見られる子どもでも、できなかつたことをできるように支援し、いくつかの課題をクリアすることで大人から褒められるなど、成功体験を積み重ねることで姿や発言、行動に変化が出てきました。

普段は学校も欠席しがちで、登校しても授業になじめない生徒が集まる部屋で過ごすことが多いような子どもでしたが、ある日「合唱コンクールで指揮者をやる！」と申し出たのです。それからは練習にも欠かさず参加するようになり、本人の中でもクラスの代表といった意識が芽生えてきたのだと感じたことを覚えています。子どもたちが自己肯定感を芽生えさせるにはどうすればいいのか、コミュニケーションや共感など、教科書だけでは理解しづらい多くのことを学ばせてもらいました。養護教諭の仕事もこの延長にあるのだから、ということを実感できたのです。授業や実習も看護一色の毎日でしたが、ゼミのおかげで養護教諭になることを目的にこの大学へ入ったことを思い出していました。

卒業論文はそこでの体験をもとに作成しました。この経験をしたことで、何気ない会話の中でのいろいろな考えを巡らせるようになり、どうい言葉かけたら



野洲養護学校での歯科指導の様子。
子ども達に分かりやすく伝えるための工夫をいつも心がけている。



滋賀県立野洲養護学校 養護教諭

奥田 祐子
Yuuko Okuda

略歴:

人間看護学部人間看護学科卒業後、
2013年4月から滋賀県立野洲養護学
校の養護教諭として保健室に勤務。
2017年5月に結婚し現姓上田となる。
資格:看護師免許、保健師免許、
養護教諭一種免許

県大時代の思い出

思い出

USP
アーカイブ
Archive
Vol. 2



奥田 祐子さんの場合

●～印象に残っている場所～

テニスコート・部室等
授業や課題にアルバイトと大変な毎日でしたが、楽しむことも犠牲にしたいはなかったのでテニスサークルへ。部室では新入生歓迎の宴会などもやっていました。



●～こだわりの一品～

麺屋ジョニーのつけ麺

ラーメンが好きで、アルバイトの後や飲み会の締めなどで週に2回は食べていました。彦根のベルロードにある麺屋ジョニーにはよく通いました。



上田 洋平さんの場合

●～印象に残っている場所 その1～

県大の芝生広場

開学当初は全学で5000人余り。せっかく真っさらなキャンパスなんだから、新しいことをやろうじゃないか。と誰もが思っていた。放課後ベンチに座っていると誰からとなく声をかけあってたちまち面白そうな企みが生まれます。時には学長まで巻き込んで。



●～印象に残っている場所 その2～

地域文化の実習室

昼休みは、高谷先生をはじめ社会学の武村先生や人類学の黒田先生を囲んでいっしょに弁当を食べました。高谷先生は探検家としてタンカーに乗船して中東へ渡った経験も。船長室で船長とご飯を食べたり、現地に着いたらイランの王族に歓迎されたり。エベレスト(?)に登ったときは500m滑落したなど、今では考えられないような生傷の絶えない体験談にワクワクしたことを覚えています。「見てきたように嘘を言う」のが講師なら、「見てきたうえで嘘を言う(夢を語る)」のが高谷である、と評された(?)独特の語りも今ではかけがえのない遺言になっています。新しい事をやろうと思ったら少なくとも30年、仲間とともにやり続けなければならないといったこともここで教えてもらいました。このように教室や授業以外の機会にも先生たちから学んだことがいい思い出としていまも強く心に残っています。



苦労を共にした友人とは卒業した今も楽しく交流

実習のはじまる3年生の秋まではとくに課題が多かったため、毎日何かを持ち帰って朝まで勉強したこともよくありました。入居当時は緊張しましたが、多くは編入などで県大に入った年上の方ばかりでした。特にルールのようなものはありませんでしたので意外に気楽でした。すぐに慣れてその後2年間を過ごしました。どうやって日々暮らしていくかということ、は切実な問題でしたが、自活しているから成績が悪くなるとか、遊べないとか、そんな言い訳を絶対したくなかったので、いずれも一生懸命やりました。それだけに時間の管理はとくにシビアでしたね。平日は塾の講師、週末は結婚式場で働きました。体も強いほうでしたし、もちろん若いですから、睡眠時間をいちばん後に回してもなんとかなりました。3年生になるころにはアルバイトにも慣れて少し余裕が出てきたので引越越しをしました。その夏から翌年の春までは実習があり、次の夏には採用試験、さらに秋には教育実習、冬には国家試験と、休憩なしでいるなんてことが続きましたので、誰にも気をつかうことなくゆっくりにできる部屋は非常にありがたく思いました。



一つでも単位を落としたり留年せざるを得なくなりすから。アルバイトも併せて大変な毎日でしたが、看護学部の生徒は目標がみんな同じということもあって、つねに刺激し合い、励まし合うことができました。課題が多いのは私だけじゃない、しんどい時はみんなしんどい、そう思うことで何とか乗り越えることができたのです。いまでも仲間意識の強い、いい学科だったと思っています。周りには私と同じ下宿生が多かったので、誰かの部屋に集まったり鍋パーティをしたり、夜中まで話したり、自由な時間を持つことができました。大切な友だちがたくさんできたことも、今思えば両親の方針のおかげと感謝しています。みんな人のために役に立ちたいという想いを持っているから分り合えるんです。人が生きていくうえで体や心の健康が基盤になることも意識として共有してきましたし、それを支えることはやりがいがあり一生続けられる仕事であると。在学中にその確信を持ったことも今思えば大事な節目だったと思っています。いい仲間とともに4年間学べたことは私にとってもかけがえのない経験であり、大切な思い出になっています。



1 2008年4月1日、新築・移転した滋賀県立野洲養護学校に勤務。現在も増築中。
2 滋賀県立野洲養護学校での健診の様子。
3 学校の掲示板には手作りのお知らせ。
4 県大時代の思い出の写真。卒業式。